HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	タタールスタン共和国によるタタール語・タタール文化の維持と継承に向けた支援策 : COVID-19 以前と以後の実施状況にも注目を寄せて
Author(s)	櫻間, 瑞希
Citation	日本中央アジア学会報, 17, 58-71
Issue Date	2021-07-31
DOI	10.14943/jacas.17.58
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89132
Type	article
File Information	JB017_016sakurama-nakamura.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

タタールスタン共和国による タタール語・タタール文化の維持と継承に向けた支援策

—— COVID-19以前と以後の実施状況にも注目を寄せて ——

櫻間　瑞希

はじめに

「タタールはどこにいようとも、自分たちの世界を作ってきた[1]（Где бы татары ни оказались, они везде создавали свой мир[2].）」とは、タタールからは時に誇らしげに、他の民族からは時に複雑な表情で語られることばである。さまざまな土地に暮らすタタールは各地でコミュニティを築き、民族的紐帯を維持してきた。

今日、タタールの全人口は600万人程度[3]と見積もられるが、そのうち500万人以上はロシア国内に居住しており、その半数に近い約200万人はヴォルガ川中流域に位置する民族自治共和国であるタタールスタン共和国に集中する。残りの100万人程度のタタールはロシア国外[4]に居住しており、中央アジア諸国などかつてソ連邦から独立を果たした国々に集中するものの、さらにフィンランドやトルコ、中国西部（主に現在の新疆ウイグル自治区）、北米諸国など、さまざまな国や地域にまたがっている。とはいえ、タタールはいずれの居住地においてもマイノリティである。コミュニティが活発に機能している土地であっても、伝統的な文化や言語の維持・継承は時に困難に直面し、生存戦略からマジョリティへの同化を選択する者は少数ではない。この状況を民族の存続にかかわる問題と捉えたのが、前述のタタールスタン共和国であった。ヴォルガ・ウラル地域を故地とする歴史観から、今日のタタールスタン共和国は世界各地のタタールにとっての歴史的故郷（*тарихи ватан*）と認識され、タ

---

(1) これに似た表現として、タタール語では「タタールはどこにいようがタタールのまま（*Татар кайда да татар булып кала.*）」というものがあり、こちらもタタール語話者のタタールからはよく聞かれる。

(2) なお、本稿では必要に応じて原文を示す。ロシア語は立体を、タタール語は斜体を用いて表記する。

(3) タタールスタン共和国および官製民族組織「全世界タタール会議」による推計に拠る。ロシアをはじめ、ソ連期に導入された民族籍（национальность）の概念が残る国や地域においては、現在も民族別人口の公式統計が発表されることも珍しくないが、それ以外の居住地においては一般的ではないことから、主に旧ソ連以外の国々のタタール人口を含めた総人口については諸説ある。

(4) 在外タタール（*чит илләрдә яшәүче татарлар*）ともいう。広義ではロシア国外に居住するタタールを、狭義ではタタールスタン共和国領域外に居住するタタールをタタール・ディアスポラ（*татар диаспорасы*）と総称する。

タールスタン共和国もまた、そのことを自負していくつかの支援策に取り組んできた。とりわけ、タタール語・タタール文化の維持・継承を促進する取り組みは近年活発に行われてきたが、2020年以降は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、方法や方針の転換を迫られたものも少なくない。

本稿では、主に中央アジア諸国における現状に触れながら、COVID-19以前と以後のタタール語・タタール文化の維持・継承に関する代表的な支援策の実施状況を紹介したい。

タタールスタン共和国代表部の設置と支援策の実施

ここではその経緯[5]は割愛するが、1994年2月にロシア連邦とタタールスタン共和国とのあいだで権限分割条約（ロシア連邦国家権力機関とタタールスタン共和国国家権力機関との間の管理事項及び権限分割に関する条約）が締結されると、タタールスタン共和国はロシア連邦憲法及び連邦法に反しない範囲での、諸外国政府と国際関係を構築する権限、民族アイデンティティならびに民族言語・文化の保護と発展に対する支援を行う権限、タタール語とロシア語の2言語をタタールスタン共和国の国家語に制定する権限などを持つこととなった。今日のタタールにとっての民族語は、その民族名を冠したタタール語であるが、かつてソ連だった領域に居住するタタールの多くは社会的情勢からロシア語話者でもあり、タタール語をまったく解さない者も少なくない。それ以外の国や地域に居住するタタールも、英語やトルコ語といった居住地における優勢な言語で生活を営む場合がほとんどである。こうした状況を危惧したタタールスタン共和国は、権限分割条約を根拠に諸外国政府と独自の関係を築きながら、ロシア国内外のタタールの言語・文化の保護と振興を目的とした活動にも取り組むようになっていった。現在、これらの諸支援のほとんどはタタールスタン共和国の国家プログラムの枠組みの中で行われている。

タタールスタン共和国と諸外国との関係構築の窓口としての役割を担うのが、共和国代表部[6]である。タタールスタン共和国に所在する企業が代表部の設置国に進出する際の支援や、設置国の企業・投資家によるタタールスタン共和国への投資の促進といった貿易、投資、融資に関する業務のほかに、タタールスタン共和国の学術・研究機関と設置国の諸機関との交流の促進、タタールスタン共和国で活動する芸術家の派遣・受入といった科学・芸術分野における業務も担っており、大使館のような機能を持つ。設置国にタタール・コミュニティがある場合には、かれらに対する支援も行なっており、具体的にはサバントゥイ（*сабантуй,*

---

(5) ロシア連邦とタタールスタン共和国とのあいだの権限分割条約および締結に至るまでの経緯については、中馬［2007］、塩川［2007: 89–161］が詳しいのでこちらを参照されたい。

(6) ロシア語では представительство Республики Татарстан、タタール語では *Татарстан Республикасы вәкиллеге* とされる。

сабан туе）[7]といったの行事の開催支援のほか、タタール語・タタール文化を学習する機会の提供（講師の派遣や教材の提供）なども重要な業務に含まれる。これらの活動は単にタタール語・タタール文化の保護と発展という文脈だけにはとどまらず、各地のタタールの民族意識と紐帯の強化、そして、タタールスタン共和国およびロシア連邦との結びつきを再確認させる狙いも含んだものと考えられる。また、後述する「カユーム・ナスィーリー・インスティトゥティ」や「アナ・テレ」の運営資金は代表部を経由しないが、一般的な民族組織（各地のタタール文化センター等）の運営支援のために共和国予算から支出される資金は主に所在国の代表部を経由して配分されることから、各地のタタール組織にとっては非常に重要な機関でもある。

タタールスタン共和国国家プログラム

タタールスタン共和国はさまざまな分野で共和国予算を財源とする国家プログラムを展開しているが、ここではタタール語・タタール文化の維持・継承に対する支援を対象とするプログラムと、その枠組みで行われている支援を取り上げる。国内外のタタールに共通する問題として、タタールスタン共和国はタタール語とタタール文化の維持と継承をめぐる状況の改善を長年の課題と捉えてきた。2021年現在は、2つの国家プログラム「タタールの民族アイデンティティの保護 2014～2022[8]」と「タタールスタン共和国の国家語および諸言語の保存、研究および発展 2014～2022[9]」が展開されている。

前者の「タタールの民族アイデンティティの保護 2014～2022」の序文では、とりわけロシア国外のタタールのあいだでタタール語やタタール文化の継承が極めて困難な状況にあることが明記されており、①タタールの歴史や文化、伝統およびタタール語を学ぶためのアクセスの確保や、②タタールの民族的・文化的アイデンティティを保存するための支援が主要目標として掲げられた。その具体的な方策として挙げられたのが、各地のタタールに対するタタール語学習機会の提供のほか、在外タタール子弟を対象としたカザンへの研修プログラム、タタール語やタタール文化の深い知識を持つ若年層を発掘・支援することを目的とした国際

---

(7) サバントゥイの「サバン」（*сабан*）は農作業に使用する鍬、「トゥイ」（*туй*）は結婚式などの祝宴を意味する。かつては長い冬のあとに、農作業を開始する季節の訪れを祝うために行われていたとされる。現在では、民族的な祭宴として毎年6月から7月にかけて各地で開催されるが、かつてはこの時期に「ジュエン」（*җыен*）と呼ばれる村落単位の集会も行われていた。サバントゥイとジュエンは、ソ連期には労働効率の観点から数週間の祝宴が続くことが問題視され、やがて統合されるようになったとされる。詳しくは櫻間［2018: 298–311］を参照されたい。

(8) Государственная программа «Сохранение национальной идентичности татарского народа на 2014–2022 годы» // Утверждена постановлением Кабинета Министров Республики Татарстан, 21 октября 2013 г. № 785.

(9) Государственная программа «Сохранение, изучение и развитие государственных языков Республики Татарстан и других языков в Республике Татарстан на 2014–2022 годы» // Утверждена постановлением Кабинета Министров Республики Татарстан, 25 октября 2013 г. № 794.

タタール語オリンピック（筆記試験をベースとした予選は各地で、本選はカザンで開催される）の実施である。これらの枠組みで実施されるプログラムの多くは各地のタタールのカザンへの招聘を伴うが、このことからは、国境を越えた民族的な団結のほかにも、タタールスタン共和国が各地のタタールにとっての中心地であることを示す目的を多分に内包しているとも読み取れる。ロシア国外で生まれ育ったタタールにとって、特に第2世代以降の場合は、現在のタタールスタン共和国が位置するヴォルガ・ウラル地域は遠い祖先が過ごした（可能性の高い[10]）地であることを親やその上の世代から聞かされてはいても、訪れた経験がない限りは自身にとっての「歴史的故郷」というイメージは抱きにくかった。国境を超えて移動した歴史から、居住環境によってはタタールスタン共和国およびその周辺地域のタタールとは言語的・文化的共通性が損なわれて久しい事例も見受けられる。ゆえに、現在のタタールスタン共和国を歴史的故郷とする、ある種のファンタジー性をも帯びた歴史観の共有は、タタール・アイデンティティの形成にあたっても重要な要素のひとつとなっているとも言えるだろう。

タタール語の使用状況をめぐる問題はロシア国外のタタールに限ったものではなく、タタールスタン共和国においても度々取り上げられてきた。タタール語は、タタールスタン共和国憲法においてロシア語と並んで国家語（*дәүләт теле*）に制定されてはいるものの、公的な場においては民族を問わず理解されやすいロシア語が使用される機会が多い状況にある。その背景にはこの地域の多民族性と多言語性があり、2010年にロシア連邦で実施された国勢調査では、タタールスタン共和国におけるタタールの人口比率は53.15％にとどまった。また、国勢調査の結果は、タタール語よりもロシア語をより得意とするタタールや、タタール語をほとんど解さないタタールが少なくないことも示しており、タタール語話者は統計上に示されるタタール人口よりもさらに少ない。ゆえに、国家プログラム「タタールスタン共和国の国家語および諸言語の保存、研究および発展2014～2022」は、共和国の国家語たる2言語の不均衡の是正に主眼を置いたものであり、ロシア語と共和国内の諸言語に対する目くばりはしながらも、特にタタール語の社会的機能の整備を主要な目的としている。その実質的な内容はタタール語の社会的機能および語彙の整備であることから、国内外からアクセス可能なタタール語教育システムの開発や、国内外におけるタタール語教育・研究拠点の設置および運営支援など、結果的に諸外国におけるタタール語の保護と振興も対象となっているという点でも特徴的である。

---

(10) 現代の文脈において「タタール」とされるのは、ヴォルガ・ウラル地域を故地とするヴォルガ・タタールとミシャル・タタール（※現在のタタールスタン共和国南部から南西部を中心に居住する人々で、今日ではタタールのサブグループに含まれることが多い。なお、彼らの話すことばはしばしばタタール語の西部方言に分類される。）を中心に、アストラハン・タタールや、時にはシベリア・タタールなども内包する、極めて複合的な集団を祖先とする人々と考えられる。その居住領域は広く、その歴史も生活様式も言語も多様性に富んだものであったが、ソ連期の民族境界の画定によって共通の言語や文化が創られていった側面もある。ヴォルガ・ウラル地域を今日のタタールに共通する故地とする歴史観もまた同様であろう。

支援事例①　国際タタール語オリンピックの実施

タタールの民族アイデンティティの保護と発展を目指す国家プログラム「タタールの民族アイデンティティの保護 2014～2022」の枠組みのなかでは、タタールスタン共和国内外に居住するタタール子弟が、タタールの歴史や文化、伝統、言語を学び、それぞれの居住地においても民族的・文化的なアイデンティティを維持・継承していくための支援策のひとつとして、2013年からカザンにて「国際タタール語オリンピック[11]」(*Татар теленнән халыкара олимпиада*)を開催している。

本大会はロシア国内外に居住するタタールの若者(主対象は14歳から25歳の生徒・学生)を対象としており、①タタールの歴史、文化、伝統およびタタール語、タタール文学への関心を高めること、②これらの学習および研究を推進すること、③特に深い知識をもつ生徒・学生を発掘し継続的な支援につなげること、の3点を主要目標としている[12]。ロシアや中央アジア諸国においてはさまざまな科目や分野における深い知識や技能を競う「オリンピック」の開催・参加が盛んであり、全国レベル以上の大会で上位に入賞すると進学の際に優遇措置を得られる可能性が高いことから、参加者の大半は大学進学を目指す生徒である。タタール語など言語分野におけるオリンピックについては、若い世代がバランスのとれた多言語話者を目指すにあたって、言語能力や文化知識の習得や発展に有用であることが度々強調されてきた[Фатхуллова, Набиуллина 2014: 216-220]。大会は予選試験と本選とに分かれており、予選試験(ロシア国内居住者は筆記試験、国外居住者がオンライン試験)の上位得点者に対し、カザンで開催される本選(例年500名程度)への出場権が与えられる。予選試験の受験者数は大会の認知度の高まりとともに年々増加傾向にあり、近年ではロシア語学校に通学する生徒や、ロシア国外のタタール語学習者の参加もみられるようになっている。

本選で問われるのは、タタール語の知識と運用能力だけにはとどまらない。参加者はタタールおよびタタールスタン共和国の歴史、タタール文学に関連する筆記試験と、作文試験とそれに対する質疑応答、事前課題に沿ったプレゼンテーション試験の3試験からなる審査のほかにも、タタールの歌や伝統舞踊、伝統楽器の演奏、詩吟などの芸術分野から1つを選択して披露する芸術審査の成績から総合的に審査される。これらの審査は2日間にわたって実施されるが、審査以外の時間帯にはタタールの青年活動家との懇談、タタール語劇の鑑賞、タ

---

(11) 日本においても主に中高生向けに「数学オリンピック」や「化学オリンピック」などが開催されるように、ロシアにおいても、学校教育の科目や各地の民族語・民族文化の知識を問う大会が開催されており、これらはオリンピック(олимпиада)と呼ばれることが多い。国際タタール語オリンピックは2013年に小規模なパイロット大会として第1回大会がカザンで開催され、第2回大会以降から国家プログラムの枠組みのなかで運営・開催されてきた。2021年現在、過去に8大会実施されている。余談ではあるが、筆者は第3回大会(2015年)から第5回大会(2017年)まで3大会連続で出場した経験があり、第5回大会で優勝した。

(12) タタールスタン共和国教育科学省省令による。Министерство образования и науки Республики Татарстан «Положение о проведении Международной олимпиады по татарскому языку». 10.11.2016 – №. исх-2990/16.

図１　大会会場で国営放送の取材を受け、流暢なタタール語で答えるフィンランド出身の青年。（2017 年４月、筆者撮影）

図２　大会閉会式。ロシア全土と世界各地から集まった参加者は、皆伝統衣装を持参している。（2017 年４月、タタールスタン共和国教育科学省撮影）

タール文化に関連する施設の訪問といった文化プログラムも組まれており、大会は原則的にはタタール語だけで過ごすことのできる稀有な機会となっている。ロシア国外からの参加者はとくに注目の的となるが、タタールスタン共和国国営放送は連日彼らの「混じり気のないタタール語[13]」を話す姿を放送しては、「歴史的故郷から遠く離れた地に生まれながら彼らはこうして美しいタタール語を話すのだから、タタールスタンに暮らすタタールは努力しなければならない」といった文脈で、主にタタールスタン共和国に居住するタタール語を話さないタタールに対し、タタール語を啓蒙するための広告塔として利用するきらいもある。しかし、こうしたプロパガンダ性を帯びた報道のありかたは、タタール語を自らの意思で選択しなかった、あるいは、様々な理由により選択できなかった人々にとっては時に窮屈で、居心地の悪いものに感じられ、却ってタタール語に対する反発を生むきっかけとなる可能性も持ち合わせている。

実際に、タタールスタン共和国においてもタタール語教育の機会の有無は居住地区の学校や、その時の学校教育制度によっても大きく左右されている。タタール語に対する愛着を持っていてもロシア語で教育を受け、ロシア語を第１言語とする例は多い。タタールスタン共和国においては、義務教育学校（非タタール語教育学校）におけるタタール語の授業時間をめぐって度々社会的な論争へと発展しており、特にロシア語教育学校におけるタタール語の授

[13] ロシアにおけるタタール語はロシア語語彙の流入およびロシア語の音韻的な影響を受けた発音が顕著に見られるが、これらは「混じり気のあるタタール語」として活動家や教育者を中心に忌避される。ロシア語語彙は副詞（例：уже すでに、вообще まったく・いったい）および現代語彙（例：скачать ダウンロードする）に顕著に現れる傾向があるが、非ロシア語圏出身のタタールはこれらの語彙を用いないことから「混じり気のないタタール語」（*саф татарча*）とされる。実際的には、新疆出身であれば中国語やウイグル語の、フィンランド出身であればフィンランド語の語彙や音韻的な影響とともにタタール語を話すのがごく一般的であり、ロシアのタタールにとっての「混じり気のないタタール語」というのは、つまり、「ロシア語の語彙や音韻的な影響がみられないタタール語」のことを指していると理解してよいだろう。

業時間数は頻繁に変更されてきた。近年では、2017年7月にプーチン大統領が連邦国家語であるロシア語教育の重要性を強調した発言をしたことにより、この論争は全露的に再燃し、タタールスタン共和国においても義務教育学校におけるタタール語の授業時間は最終的に大きく削減されるに至った。ロシア語話者を中心に義務教育におけるタタール語必修義務の撤廃そのものを訴える声も多く、プーチン氏の発言は結果的にこれらの訴えに加勢するものとなったことは否めない。結果的に、タタール語の窮状を訴え、タタール語化の強化を要求していた人々（その大部分はタタールである）と、それを望まない非タタール語話者（タタール語を話さないタタールも含む）とのあいだに元々あった溝が、より一層深まることになってしまった。

このように、タタールスタン共和国に居住する場合であっても、タタール語学校に在籍しない限りは、ロシア語優位の生活を送る若年層のタタールは少なくない。それ以外の地域については言わずもがなである。また、ロシア国外のタタールは居住国の国家語や公用語を日常的に使用する機会が多いことから、タタール語が使用されるのはもっぱら家庭内や民族コミュニティの中だけにとどまるのが現状である。ゆえに、すでに述べた通りではあるが、タタール語オリンピックは家庭やコミュニティの外にありながら、タタール語でのみ過ごすことのできる数少ない機会となっている。また、参加者のなかには将来的に地元の民族コミュニティの指導者となる若者も少なくないことから、タタール語オリンピックはそうした志を持った若者同士が国境を超えて知り合う場でもあった。

2020年4月には第8回目となる本選がカザンにおいて開催される予定だったが、ロシア全土的なCOVID-19の感染拡大により無期限延期となった。タタールスタン共和国教育科学省は、状況次第では夏に開催できることを見込んで準備を行っていたが、その後も世界的な流行が収束しなかったこと、とりわけロシア国外からの参加者の受け入れが不可能であったことから、同年7月には正式に中止が決定された。その後も感染拡大は続き、2021年を迎えた頃には1日あたりの国内新規感染者数が3万人近い日が続いたことから、2021年4月の開催も危ぶまれていたが、3月ごろに新規感染者数が1日8000人台に落ち着くと様々な制限が撤廃されるようになった。結果的に、第8回大会はロシア国内の参加者をカザンに集め、ロシア国外の参加者はリモートでの一部参加というハイブリッド形式での開催となった。コロナ禍における国際タタール語オリンピックの開催について、大会の事務責任者を務めるタタールスタン共和国教育科学省職員のM氏（希望により仮名）は以下のように語る[14]。

[14] 2021年5月27日にオンライン電話ツール（zoom）を用いて実施した聞き取り調査による。当初は現地での聞き取り調査を実施する予定であったが、COVID-19の感染拡大に伴う出入国の困難により、対面調査は不可能であった。これ以降でオンライン電話ツール等を用いた聞き取りの実施背景はいずれも同様である。

「大会の目標を最低限達成することはできたが、例年であれば副次的に生じていた様々なポジティブな側面が（感染防止のための）制限によって少なくなった。（中略）参加者同士の交流には例年ほどの盛り上がりはなく、国外のオンライン参加者にいたってはカザンに来るどころか、参加者同士の交流の機会そのものもなかった。SNS やメッセージアプリでグループを作って交流を促すなどしたが、初対面では難しかったようでうまくいかなかった。私たち（タタールスタン共和国）としても、優秀で活発なタタールの若者同士が知り合う機会を提供したいと思っているので、オンラインのプラットフォーム作りは価値のある課題と捉えている。」（文中括弧内は筆者による）

第 8 回大会では、過密空間を避けるためにロシア国内の本選参加者は例年の半分以下に絞られ、交流行事等の削減も余儀なくされた。また、ロシア国外からオンラインで出場した参加者は、プレゼンテーション試験と作文課題の代わりに実施された口頭作文のみの参加となったことから、他の参加者との交流の機会は SNS やメッセージアプリに限られたほか、そのほかの行事等に参加する機会はなかった。コロナ禍の収束の見通しが立たないなかで、次大会の開催方式については複数の案を検討中とのことだが、参加方式を問わず交流する方策もまた模索されている。

支援事例②　カユーム・ナスィーリー・インスティトゥティの設置と運営

タタール語の社会的機能の整備を目指す「タタールスタン共和国の国家語および諸言語の保存、研究および発展 2014～2022」の枠組みのなかでは、タタールスタン共和国外におけるタタール語の学習と教育に向けた支援策として、2014 年から国内外に「カユーム･ナスィーリー・インスティトゥティ[15]（*Каюм Насыйри институты*）」（以下 КНИ）の設置が進められてきた。2021 年現在は、タタールスタン共和国周辺の諸都市およびロシア国内の大都市部、そしてロシア国外ではヌル=スルタンとビシケクの計 11 都市に設置されている（表 1）。

タタールスタン共和国およびその周辺地域にはタタール人口が多いことから、民族組織や日曜学校などの活動も活発で、各地でタタール語・タタール文化の保護・振興に向けた地道な努力が積み重ねられてきた。しかし、異なる地域の団体同士の交流は乏しく、民族組織全体の統一性や一貫性には欠けるという問題も指摘されてきた［Shaiakhmetova et.al. 2017: 629］。

[15] インスティトゥト（институт）はロシア語を経由してタタール語に入った語彙で、多くの場合は大学などの教育機関が想起される。辞書的には単科大学や研究所を指すので、カユーム・ナスィーリー大学だとか研究所と直訳することも可能ではあるが、実際のところは大学でも研究所でもなく、小規模なタタール語教育センターという趣である。こなれた訳としては「学院」がしっくりくる。ただし、トルコのユヌス・エムレ・インスティトゥートなどは日本語においても原語に従った形であることから、本稿においても同様の形とした。なお､カユーム･ナスィーリー（1825−1902）はタタールに科学知識を広めることに注力した教育者･啓蒙活動家･文筆家であり、その過程で現代タタール語の礎となる文章語を確立させた人物である。

表１　カユーム・ナスィーリー・インスティトゥティの所在地と開設日一覧[16]

所在地	開設日
ロシア連邦モスクワ市 ムサ・ジャリル記念第1186番学校敷地内（市内最大のタタール語教育学校）	2014年12月17日
カザフスタン共和国ヌル＝スルタン市 ユーラシア国立大学文学部内	2014年12月19日
ロシア連邦サンクト＝ペテルブルク市 タタールスタン共和国常駐代表部敷地内	2015年12月16日
キルギス共和国ビシケク市 キルギス・ロシア・スラヴ大学国際関係学部内	2015年12月24日
ロシア連邦バシコルトスタン共和国ウファ市 バシコルトスタン国立教育大学文学部内	2016年10月21日
ロシア連邦ペンザ市 民族組織「ペンザ州におけるタタール民族文化の自治」敷地内	2017年1月10日
ロシア連邦チュヴァシ共和国チェボクサルィ市 チュヴァシ国立大学ロシア・チュヴァシ文学部内	2017年12月25日
ロシア連邦ウリヤノフスク市 ウリヤノフスク市タタール文化センター敷地内	2019年２月20日
ロシア連邦エカテリンブルク市 タタールスタン共和国常駐代表部敷地内	2019年９月10日
ロシア連邦トボリスク市 市立自治文化機関「シベリア・タタール文化センター」敷地内	2019年12月25日
ロシア連邦サマラ市 サマラ州公共民族団体「ドゥスルィク」（*Дуслык*）敷地内	2020年12月24日

特に各地のタタール語講座からの強い要請もあり、タタール語・タタール文化の教育に関連するさまざまな経験の蓄積を統合する目的で、教育研究施設の設置が急がれることになった。このような経緯から、КНИはタタール人口の多い地域に先行して設置されるようになった。КНИのコンセプトは、ゲーテ・インスティトゥート（ドイツ）やユヌス・エムレ・インスティトゥート（トルコ）、孔子学院（中国）など、諸外国の文化促進団体から影響を受けたものと考えられる。公式ページ[17]に記述された説明文によると「タタールスタン共和国外（ロシア国内および諸外国）におけるタタール語・タタール文化の教育・支援・普及・発展」を目標としている。タタールに対する民族教育の側面が最も重要視されてはいるものの、これらに関心のある非タタール出自の学習者を対象とした講座も持つことから、いわばタタール語・タタール文化の宣伝・普及機関としての機能も持ち合わせていると言えるだろう。

ユーラシア国立大学（カザフスタン共和国ヌル＝スルタン市）の敷地内に設置されたКНИ

(16) カユーム・ナスィーリー・インスティトゥティ公式ウェブサイトより。«Институт Каюма Насыри», URL: https://kpfu.ru/philology-culture/ikn, 閲覧日：2021年8月5日。

(17) カユーム・ナスィーリー・インスティトゥティ公式ウェブサイトより。«Институт Каюма Насыри», URL: https://kpfu.ru/philology-culture/ikn, 閲覧日：2021年8月5日。

図 3　COVID-19以前のタタール語講座では他の受講生との身体的な距離は近く、それが問題になることもなかった。（2013 年 10 月、筆者撮影）

図 4　COVID-19以降のタタール語対面講座は飛沫対策と“社会的距離”が意識される。（Г. Т. Өхмәтова 提供）

の所長を勤めるヴェネラ・ザキロワ氏によると[18]、市内に居住する希望者を対象とした無料のタタール語講座は 2015 年 1 月から 2021 年現在に至るまで続いており、それぞれカザフ語とロシア語で教授される初級クラスが週に 1 コマずつ開講されている。受講者の大多数はユーラシア国立大学に所属するカザフスタン出身のタタール学生が占めるが、カザフ出自の学生をはじめ非タタール出自の留学生などの参加もあるという。これまでにのべ 480 名程度が受講し、そのうち 100 名近くは非タタール出自の学習者であった。その背景として、所長のザキロワ氏は「物珍しさもあるだろうが、他者とは違った言語を身につけたいという欲求を持つ学習者の需要もあるようだ」と指摘する。定期的なタタール語講座のほかに、タタール語の知識や運用能力を高めることを目的とした諸行事（タタール語一斉書き取り試験、詩の朗読大会、エッセイコンテストなど）を実施するとともに、カザフスタン国内のタタール語教師を対象とした研修や、タタール語教育に関する研究会なども実施してきた。ヌル＝スルタンにおける КНИ は、大学生を中心とした若い世代に対するタタール語の恒常的な学習機会を提供するとともに、カザフスタン国内のタタール語教育・研究の水準を向上させるための機能を持ち始めているとも言えるだろう。非タタール出自の学習希望者にも門戸を開いているという点でも特徴的で、結果的にはヌル=スルタンにおけるタタール語の保護のみならず、新たな話者の拡大にも繋がっている。

カザフスタンでは 2020 年 3 月に国内で COVID-19 の感染者が確認されたが、首都ヌル＝スルタンでは 4 月から 8 月にかけて急速に感染が拡大し、諸施設の一時的な閉鎖や諸行事の延期・中止が相次いだ。КНИ においても教師および受講生に感染者が発生したことから、本来であれば 3 月から 6 月にかけて開講予定だったいくつかの授業や、文化行事はいずれも中止となった。建物への立入も制限されたことからオンラインでの実施が検討され、実際に 7

[18] 2020 年 7 月 10 日にオンライン電話ツール（zoom）を用いて実施した聞き取り調査による。

月から8月にかけて開講された初級者向けの夏季プログラムは全てオンラインでの実施となったが、これについて担当した講師は以下のように語っている[19]。「受講生同士での会話練習など、インタラクティブな内容はほとんどできなくなった。文法の説明は（対面実施時よりも）詳しくできたが、私自身も受講生の多くも、実践会話から身につけるほうが効率的だと感じていたことから、これはスタイルや好みに合うものではなく、満足できる授業とは言えなかった。」（文中括弧内は筆者による）

その後国内の感染拡大状況がやや落ち着きをみせたことから、同年9月には対面授業を再開したが、講演会等は引き続きオンラインでの実施となり、文化行事の大半も一部削減・縮小しての開催となった。2021年4月には再び感染者数が増加したため、タタール語授業や文化講座等はいずれもオンラインでの開講に切り替わったが、所長のザキロワ氏は①高齢者の参加が難しくなったこと、②機材や回線環境により参加が阻まれる受講生が存在すること、③1対複数（教師と複数の受講生）の場合は受講生同士が新たに知り合いにくくなったこと、の3点を重大な課題として挙げた[20]。

支援事例③　オンライン・タタール語教育プログラム「アナ・テレ」の開発と導入

同じくタタールスタン共和国内外におけるタタール語の学習と教育に向けた支援策として、2013年にオンライン教育プログラム「アナ・テレ[21]」（*Ана теле*）が開発・導入された。教材の開発と制作には、カザン連邦大学タタール語学科の教員および大学院生からなるプロジェクトチームが携わり、システムはスウェーデンに本社を置くEF Education Firstのサービスを導入している。2021年現在は、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のA1からB2レベルまでをカバーする9コース（全288課）からなり、タタール語学習に関心を持つすべての人に無料で公開されている。タタールスタン共和国内外におけるタタール語の振興はこれまでにも断続的に行われてきたが、その手段は伝統的に対面授業の提供または開講の支援であった。「アナ・テレ」は場所や時間、対象を定めずにタタール語学習の機会をオンライン上で提供するものであり、その開講環境のみならず、タタール語を学習言語として国際的に普及させるという観点からも、これまでとは明確に異なる方向性と波及力を持っている。2017年の

---

(19) 2021年5月24日にオンライン電話ツール（zoom）を用いて実施した聞き取り調査による。

(20) 2021年6月2日にオンライン電話ツール（zoom）を用いて実施した聞き取り調査による。

(21) アナ（*ана*）は「母」を、テレ（*теле*）は「～の言語」（*тел* に3人称所有接辞 *-е* がついた形）を意味する。直訳すると「母語」となるが、類似した表現にトゥガン・テル（*туган тел*）という、日本語においてはやはり母語と訳さざるを得ないものがある。ロシア語にすると前者は язык матери、後者は родной язык であり、そのニュアンスは若干異なるものであることに注意されたい。2021年現在、CEFR で A1～B2に相当する9の学習コースがあり、これらは全288課、288のスキット動画、全1,600問の練習問題からなる。登録・利用ともに無料で、ロシア語、タタール語、英語の3言語を通じて無料でタタール語を学習することができる。アクセスおよび登録は anatele.ef.com から可能。

表２　中央アジア諸国に居住する「アナ・テレ」アクティブユーザ数の推移（毎年２月１日時点）

	2013.02.	2014.02.	2015.02.	2016.02.	2017.02.	2018.02.	2019.02.
カザフスタン	344	278	389	403	455	499	504
キルギス	162	101	82	152	168	139	142
ウズベキスタン	289	269	292	314	340	357	339
タジキスタン	39	22	13	9	11	5	11
トルクメニスタン	0	0	0	3	2	2	1

報告によると、2013年のリリースから2017年までの５年間で累計約４万9000名の登録があった。うち約1700名がロシア国外からアクセスするユーザで、ユーザ全体の居住国は57カ国にのぼった。そのすべてが必ずしもタタール出自の利用者ではないことは明白である。「アナ・テレ」は本来的には在外タタールを対象としたタタール語の学習と継承を振興するための支援策ではあったものの、これもまた、結果的に非タタール出自の人に対してもタタール語学習の機会を提供することに繋がっていると言えるだろう。

なお、タタールスタン共和国教育科学省の非公開資料[22]（2020年）によると、2013年以降に中央アジア諸国からアクセスするアクティブユーザ数（半年間アクセスがないとアカウントが一時停止されることから累計登録者数ではない）は、表２に示す通りである。カザフスタンとキルギスではКНИの開設以降に「アナ・テレ」のアクティブユーザ数の増加がみられた。ユーザ数の増減はみられるものの、中央アジア諸国においてもインターネットを通じてタタール語に触れる機会は増えつつあると考えられる。しかしながら、「アナ・テレ」は非常に多くの動画や音声コンテンツを含むために、回線環境や使用機材によっては利用が難しい。オンライン教育システムは利用者が利用可能なリソースに依存するという性質から、各人の経済状況や居住地の回線状況に大きく左右されるという問題点もある。また、2020年中には中上級コースの教材作成が計画されていたが、COVID-19の感染拡大により中断を余儀なくされ、アップデートは当初の予定から大きく外れてしまった。特に対人接触が避けられない会話スキットの撮影は最大の課題となっている。タタールスタン共和国ではロシア国内でも感染者数が比較的少なく抑えられていたことから、2021年には多少の撮影は進んだとのことだが、当初の計画から変更して音声のみの提供とするセクションも複数含まれている。

おわりに

ここまで、タタールスタン共和国が国家プログラムの枠組みの中で展開するいくつかの支援策を概観してきた。これらの取り組みはいずれも若い世代の参加や利用を念頭に置いたも

[22] タタールスタン共和国教育科学省非公開資料による。Министерство образования и науки Республики Татарстан «О дистанционном обучении татарскому языку по проекту “*Ана теле*”». 20.01.2020 – No 51a.

のであり、次世代の継承の担い手となる人々に、タタール語やタタール文化という選択肢の存在そのものをアピールするものとなっている。また、タタール語の学習機会やタタールスタン共和国への訪問機会の拡充は、「歴史的故郷」から遠く離れた土地で暮らすタタールにとっては、民族的な帰属意識や故地であるタタールスタン共和国との精神的な繋がりを強化するきっかけともなり、それはやがて国境を超えた民族共同体の影響力の強化にも繋がっていくであろう。他方で、積極的にタタール語を選択しないタタールから頻繁に聞かれることばではあるが、タタール語を知っていてもできることが少ないという諦めが広く共有されていることは、依然として大きな課題として残る。得られる情報量やさまざまな場面における使用頻度を底上げすることは簡単とはいえず、話者数を減らさない、話者数を増やす、というごく単純な方法でしか解決することはできない。そのためにはタタール語の社会的バイタリティそのものを向上させる必要があり、タタール語メディアの情報量などを減らさないことは当然ながら、魅力的なタタール語コンテンツの制作・発信なども戦略として重要な視点となってくるかもしれない。

2020年以降はCOVID-19の影響も大きく、物理的な移動と対面接触を伴う諸行事は、あり方そのものを根本的に見直す必要に迫られている。タタールの居住地域は多くの国や地域にまたがるという特性から、オンラインへの移行は確かに一定の支持は得られるであろう。しかし、新たな交流は生まれにくいという課題も指摘されているように、単純にオンラインで実施すれば万事解決ということにはならず、2021年現在も解決の糸口が探られている。そして同様の課題はタタール世界に限った話ではなく、コロナ禍でさまざまな物事が急速にオンラインに移行した世界各地で、現在進行形で共有されるものでもある。

参考文献

櫻間瑛 2018『現代ロシアにおける民族の再生：ポスト・ソ連社会としてのタタルスタン共和国における「クリャシェン」のエスニシティと宗教＝文化活動』三元社。

櫻間瑞希 2021『現代タタール・ディアスポラの言語選択：ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタンを事例として』筑波大学人文社会科学研究科博士学位請求論文。

塩川伸明 2007『ロシアの連邦制と民族問題（多民族国家ソ連の興亡Ⅲ）』岩波書店。

中馬瑞貴 2007「ロシアの連邦中央とタタルスタン共和国との間の権限分割条約」『外国の立法：立法情報・翻訳・解説』232、111−119頁。

Shaiakhmetova, Liliya, et.al. “2017. Tatar Virtual Institute of Kayum Nasyri,” *Journal of History, Culture and Art Research* 6 (6), pp. 628−633.

Сакурама-Накамура, М. А. 2018. «Татарская диаспора и туган тел: ситуация татарского языка

среди татар в странах Центральной Азии», *Татар теле, әдәбияты һәм тарихы: үткәне, бүгенгесе һәм киләчәге*, стр. 28–38.

Фатхуллова, К. С., Набиуллина, Г. А. 2014. «Студенческие олимпиады по татарскому языку как возможность самореализации», *Вестник ТГГПУ* 4(38), стр. 316–320.

Нурмөхәммәтова, Р. С. 2016. «“Ана теле” онлайн-мәктәбендә җанлы сөйләм дәресләре», *Мәгариф* 4(10), 14 бт.

（日本学術振興会特別研究員 PD（早稲田大学））